

ハ訶利底母ノ食トシ、或ハ魂靈神ノ料ニ充、皆因縁有普ク諸鬼ニ及スガ故ニ散飯ト名クト云、宋朝ニハ生飯ト書テサンハトヨム、是ヲ出生飯ト云、故ニ宋朝ニハ生ノ字ヲサント讀也、略○中 出生食トハ、釋尊、鬼子母、訶利底母、曠野鬼等ニ、僧ノ食ヲ分テ與ヨト被仰置タリシカバ、是ヲ其分ニアツル也、然ニ鬼此小飯ヲ得テ多成テ食スレバ、出生ト名ル也、サレバ取事律ノ法ニハ七粒ニ不過、其故ハ一粒ニ百億ノ功アリ、種ヨリ納取テ飯ニスルマデノ其功如此、是ヲ顧テ勞ク重クスル心也、佛約ノ鬼神ノ食猶如此、況ヤ破戒ノ比丘ノ多食ヲヤ、尤可心得事也、三把ト書事必三度可把也、初ハ三寶ニ供シ、次ニ殘食ヲ食トシテ誓ヒ給、故ニ不動明王ニ供シ、次ニ訶利底母ニ供スベシト云々、三飯又同義也、サバト云ハ、和ゲテ云詞ナルベシ。

〔安齋隨筆 前編十五〕一 生飯 生飯或俗に散飯と書ク、是をサバと云也、飯ヲ器に盛たる上に小ク丸めて上に置を云也、是佛家にてする事也、僧徒の飯を食する時此生飯を取て別器に置て呪文を唱て訶利帝天竺ニテ食物ヲ作始メタル人トカヤ云に供へ祭る、是佛家の習俗也、然るに吾朝廷御飯に生飯を置く事あり、是代々天子佛法を崇敬し玉ふ故、佛家の習俗の移りたる也、抄生飯の事、禁秘、又神供の御飯にも生飯を置事あり、是も行基、弘法、傳教、慈覺、智證等の僧本地垂跡の説を造り出してより、神佛混雜する事盛に行はる、故、佛家の習俗いつとなく神社へも移りたる也、左齋宮神供生飯の事、

〔傍廂 後篇〕さば

さばは生飯、散飯、三飯、早飯などかけれど、皆かり文字なり、梵語なればしれがたし、飯を器に盛たる上に、又飯をちひさく丸めて上におくをいふ佛家にて僧徒の食する時に、先此さばを作りて、別記に置きて、呪文を唱へ、訶利帝へ供ふ、この訶利帝といふは、天竺にて食物を作り始めたる人とかや、佛家のならはしなるを、朝廷にて佛、佛法御崇敬よりうつりしなり、佛祖統記、釋氏要覽などに、正食とあるに同じ、壺囊抄にも鬼神に先供する飯をいふよしあり、論語郷黨、雖蔬食菜羹瓜